

「朝日新聞社記事」のご紹介

校長 中村 成希

2022年に沖縄が日本に復帰して50年をむかえます。そこで、沖縄美ら海水族館の記事が朝日新聞に書かれており、長崎佑先生のコメントも掲載されてますのでご紹介します。

(朝日新聞 2021年5月15日付 承諾番号 21-1964 ※朝日新聞社に無断で転載することを禁じる)

海洋博 観光ブーム 米テロ 海外客増 コロナ



②沖縄国際海洋博覧会のオキちゃん劇場＝1975年ごろ
③「オキちゃん劇場」のイルカショー＝2020年10月、国営沖縄記念公園（海洋博公園）提供



「オキちゃん」は、1972年5月15日の日本復帰を記念した一大事業のマスコットマークの名前だった。75年から開かれた沖縄国際海洋博覧会（海洋博）。当時の資料には「世界の人々が従来の暗い沖縄観を拭き去り、認識を新たにする機会」と書かれている。

復帰前、米軍統治下の沖縄を訪れるのは慰霊や戦跡巡りが中心。広大に残された米軍基地をめぐる問題もある。海洋博は、そうした「暗い」イメージを塗り替

えた。政府などが主導した観光戦略だった。青い海にサンゴ礁、亜熱帯の木々。博覧会では「南国」イメージが前面に押し出され、展示の目玉の一つはイルカショー。鹿児島・奄美近海で捕獲され、機敏で物覚えがよく「スター性がある」と見込まれた。ミナミバンドウイルカのメス1頭がその名を付けられ、ショーも「オキちゃん

復帰50年へ

半世紀近く前、日本に復帰してまもない沖縄に移り住んだ1頭のイルカがいる。沖縄美ら海水族館（沖縄県本部町）で、日本最長の飼育記録を更新中の「オキちゃん」だ。観光ブームやテロ事件の波紋、念願の出産、コロナ禍と、荒波も乗り越えながら、オキちゃんはきょうもジャンプ。

沖縄の荒波 オキちゃんと 乗り越えて

オキちゃん 沖縄の歩み	
沖縄の観光	
1972年	沖縄、本土復帰
73年	第1次オイルショック
75年	沖縄国際海洋博覧会が開幕
77年	77年から航空会社が本格的な沖縄キャンペーンを開始
78年	車が右側通行から左側通行に
83年	バブル経済崩壊
92年	首里城復元
99年	沖縄でサミット開催
2000年	首里城が世界文化遺産に登録
01年	米国で同時多発テロ
02年	02年から新型肺炎SARSが流行
03年	モノレール「ゆいレール」開業
08年	リーマンショック
10年	東日本大震災が発生
11年	同年度の来館者が378万人、過去最多に
17年	コロナ対策のため、水族館がたびたび臨時休館。オキちゃん劇場は7カ月にわたって休演に
20年	20年から新型コロナが流行
21年	世界自然遺産に沖縄島北部と西表島が登録される見通しに

劇場」になった。急な投資に反動

海洋博の会場跡は公園や水族館となり、劇場も残された。しかし、スタッフのほとんどは、本土の水族館に帰り、不安定な飼育環境で何頭ものイルカが死んでしまった。高速道路の整備が進み、大型ホテルが次々と開業した沖縄は、急激な投資の反動で、倒産や失業



●長崎佑先生（理科：生物担当）
前職「沖縄美ら海水族館」「鴨川シーワールド」「新屋島水族館」等で勤務。

が相次ぐ。「海洋博シヨック」に見舞われた。立て直そうと、水族館には地元の高校を卒業した若者が飼育員として雇われた。千葉県から助っ人として招かれた長崎佑先生（75）は、若さや活気に満ちた当時の雰囲気によく覚えていた。イルカの調教では、オキちゃん存在に助けられた。「頭がよくて、頑張り屋さん。彼女をまず訓練すれば、自然と周りがついてきた」

99年、シヨクの最中、兆候がみられた。観客は全員、会場の外に出てしまった。かたすをのんで見守る飼育員たちの目には、悠々と泳ぐオキちゃん、びったりと体をよせる赤ちゃんの姿が映っていた。

20年、劇場は7カ月にわたって休演した。オキちゃんにとって初めての経験。体調を崩さないよう、1日5回、無観客で「公演」を続けた。あの海洋博からシヨクを続ける仲間、飼育員も含め、もつたもいない。ただ、地元でその名を知らない人は多い。推定50歳前後。飼育員の比嘉克さん（32）は言う。「大きな変化してきた沖縄で、オキちゃんはずっと変わらない特別な存在。コロナ禍で苦しい今も、元気をあが勇気をくれます」